

様 式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32664

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19971

研究課題名（和文）魏晉玄学とその展開相としての玄言詩に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Metaphysics and Metaphysical Poetry as its Development in the Wei and Jin Dynasties

研究代表者

和久 希 (WAKU, Nozomi)

二松學舎大學・文学部・講師

研究者番号：40965927

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西晋期から東晋期にかけて文学史上に出現した「玄言詩」の隆盛に着目し、それを直前の魏晉交替期に盛行していた「魏晉玄学」の思想史的文脈に接続させようとする取り組みである。本研究期間においては、具体的には（1）西晋の何劭による玄言詩と魏晉玄学理解、（2）『周易』注釈史における三国魏の王弼と東晋の韓康伯による解釈の相違点、そして（3）東晋のユ闡による玄言詩と『莊子』『周易』解釈について取り上げ、研究成果を発表してきた。これにより、従来必ずしも密接に結びついてこなかった魏晉時代の思想史と文学史の汽水域を解明し、両者をなめらかに疏通させながら総合的に把握するための視座の一端を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の遂行は、魏晉時代を対象として、当時の形而上学の諸相を主対象とするものであり、のみならず西晋期から東晋期にかけて文学史上に出現した「玄言詩」の思想史的背景を明らかにするという意義をもつ。ゆえにその成果は、中国哲学、中国文学の複数の領野に貢献するものであるといえる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the rise of metaphysical poetry that emerged in history of literature between the Western and Eastern Jin periods, and attempts to connect it to the context of the history of "metaphysics" thought that flourished during the Wei-Jin alternation period. This study specifically addressed the following three points and published the results of the study. (1) The production of metaphysical poems by He Shao and his interpretation of metaphysics, (2) Differences in interpretations by Wang Bi and Han Kangbai in the history of the annotations of the Zhouyi, and (3) Metaphysical Poetry by Yu Chan and the Interpretation of the Zhuangzi and the Zhouyi. This research clarified the brackish waters between the history of philosophy and the history of literature in the Wei-Jin period, which have not necessarily been closely connected in the past, and presented a part of the perspective for comprehensively grasping the two by smoothly soporating them.

研究分野：中国哲学、中国文学

キーワード：魏晉玄学 玄言詩 何劭 王弼 韓康伯 ユ闡

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

一般に「玄言詩」とは、経書『周易』や『老子』『莊子』などの形而上学に依拠しつつ、抽象度の高い語彙を多用した韻文のことをいい、とくに西晋期から東晋期の知識人のあいだで盛んに制作されたものを指す。これについて、現代の文学研究は一樣に、詩としての味わいに欠け、生硬な思想用語を並べ立てただけの無味乾燥な作品群であると評しており、前野直彬『中国文学史』（東京大学出版会、一九七五）をはじめとする一般書においても「玄言詩」に関する記述は簡略にとどまる。そのうちわずかな積極的評価としては、のちの陶淵明（田園詩）や謝靈運（山水詩）といった六朝時代を代表する詩人たちの以前にあって、退隱を志向する詩境の先駆となっている（が、その味わいは後代に及ぶべくもない）という程度のものであった。ただし「玄言詩」をめぐるこれらの評価は、言語芸術としての詩、といった近代的文学観にもとづく視座で古典を裁断するものであり、そのまま従うことはできない。むしろ、現在からすると空疎でしかないものに対して、当時の知識人がこぞって並々ならぬ関心を示していたことの意味を検証することこそが、古典学としての課題であるように思われるからである。かかる問題意識のもと、本研究では「玄言詩」について、それを直接的に先秦期の古典思想に結びつけるのではなく、直近の魏晋交替期に盛行していた「魏晋玄学」の一種の歴史的展開相、あるいは変奏であるとみる。そもそも「魏晋玄学」とは、漢代の儒教経学が鄭玄によって集大成されて以後、新たに老莊の形而上学と結びつきつつ、形象や言語を超えたところに儒教の究極的真理（理）を見出そうとした学問思潮であり、そこでは魏の王弼による『周易注』『老子道德経注』、あるいは西晋の郭象による『莊子注』などが陸続と発表された。すなわち当時において、やはり『周易』や老莊といった古典思想を資源として、新たな形而上学的思惟がさまざまに模索されており、それが学問思潮の新たな主流となっていたのであった。これらの形而上学に関する研究はすでに分厚いものがあるが、ただし、その関心は「魏晋玄学」から格義仏教、あるいは道教経典の整備といった思想史上の論点と相まって、いわゆる儒仏道の三教交渉という思想史的文脈を前提とする方向性を有しており、それゆえ「玄言詩」をめぐる文学研究と「魏晋玄学」をめぐる思想研究との間には、結果的に十分な交流が果たされないまま、現在に至っているのが実情である。そこで本研究では、あらためて両者の語彙や思想の背景を渉猟し、また行論や修辭の細部に至るまでを検証することで、両者の内的な継承関係を導出して、「魏晋玄学」から「玄言詩」へという歴史的展開を文献実証的方法により架橋、確定することを目標とする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの研究史において取り上げられることの少なかった「玄言詩」に着目し、さらにそれを先秦期の古典思想ではなく、直近に盛行していた「魏晋玄学」の思想史的文脈に配置することで両者を接続させ、一貫した構想のもとに描き出すことにある。具体的には、以下に後述する個別的对象を中心として、単に使用語彙の類似だけでなく、思想的背景、および論理や修辭的技巧などを含めて総合的に精査しながら「魏晋玄学」から「玄言詩」への影響関係の実証的な探究をおこなうことで、これまで必ずしも有機的に結びついてこなかった魏晋時代の思想史と文学史の汽水域を解明し、両者をなめらかに疎通させながら統合的に把握することを目指すものである。

本研究の個別的对象は、以下の通りである。

(1) 何劭研究

西晋の重臣であった張華と親交のあった何劭は、張華との贈答詩の中で相互に『莊子』を引用しながら退隱への志向を述べる。中島千秋「何劭の詩について」（『愛媛大学紀要・人文科学』一一、一九六五）はこれを当時の貴族特有のポーズであるとするが、何劭には他にも「遊仙詩」「雜詩」において、玄学的語彙を多用しながら同様の願望を繰り返し表現している。本研究では、何劭が荀粲・王弼といった魏晋玄学の開拓者たちの伝記を制作していたことに着目し、彼の玄学理解とそれを反映した詩作の関係についての探究をおこなう。

(2) 王弼と韓康伯の『周易注』に関する研究

魏晋玄学の旗手とされる魏・王弼とそれを継承した東晋・韓康伯の『周易注』をめぐる比較研究には、つとに加賀栄治「王弼より韓康伯へ」（『人文論究』九、一九五三）に代表される古典的成果があり、資料的な整理は尽くされている感がある。ただし本研究では、同一の古典に注釈を施した二人による議論が各々力点を異にしている点に着目し、それを魏晋玄学自体の動的展開として捉え、その推移の実相を検証する。

(3) ユ闡研究

東晋の玄言詩を代表する詩人の一人であったユ闡は、すぐれた詩人であると同時に『周易』解釈に関する論文である「蓍龜論」や、郭象の『莊子』解釈を評した「郭先生神論」などの著作をもつ理論家でもあった。すなわち彼の平生にあっては、玄学の理論的追究と詩作とが分かちがたく結びついていたのである。そこで本研究では、彼の理論と作品とを横断的に検討することによ

り、魏晉玄学と玄言詩とを相互に一貫したものとして把握する視座を提示する。

3. 研究の方法

本研究は、文献学的手法により「玄言詩」「魏晉玄学」両者の特徴的語彙を洗い出すとともに、それらの思想的背景、および論理や表現における連続性を詳細に精査・検証することにより「魏晉玄学」から「玄言詩」へと架橋する継承関係の実態の解明を目指すものである。とくに、本研究は「魏晉玄学」の語彙はもちろんのこと、それらの理論的特徴や思想史上の変遷を十全に把持したうえで、それらがいかにして「玄言詩」として、韻文の表現に結実するかに着目するものであり、単なる固定的な術語の踏襲ではなく、その思想的背景や、論理、修辭を含めた表現の全体を連続的かつ立体的に立ち上がらせることを強く意識して検証を進める。

4. 研究成果

本研究では(1)西晋の何劭による玄言詩と魏晉玄学理解、(2)『周易』注釈史における三国魏の王弼と東晋の韓康伯による解釈の相違点、そして(3)東晋の王弼による玄言詩と『莊子』『周易』解釈について取り上げ、研究成果を発表してきた。これにより、従来必ずしも密接に結びついてこなかった魏晉時代の思想史と文学史の汽水域を解明し、両者をなめらかに疏通させながら総合的に把握するための視座の一端を提示した。

令和4年度は、まずは西晋の重臣であった何劭についての検討をおこなった。何劭「贈張華」詩は『文選』李善注以来『莊子』をふまえて制作されたことが定説となっており、本研究もそれを認めるものであるが、ただし当該詩は『莊子』を背景に持ちつつも、その言辭において三国魏の王弼による議論を反映しているところがあった。実際に何劭は「荀粲伝」「王弼伝」を著すなど、魏晉玄学の継承者といえる一面を有している。本研究では上述の資料とそれ以外の詩文を横断的に検討することで、彼の詩作と表現が魏晉玄学のひとつの変奏であることを導出した。次に、魏晉玄学自体の歴史的推移を明らかにするため、魏晉玄学の旗手とされる王弼とそれを継承した東晋・韓康伯の『周易』解釈の質的差異を検討した。両者の比較検討にはつとに加賀栄治に代表される古典的研究成果があり、資料的な整理は尽くされている感があるが、本研究では、同一の古典に注釈を施した両者の形而上学的議論が、とくに「無」と「道」の理解において決定的に異なるものであり、また「神」概念に関しても力点を異にしていることに注目し、それを思想史上の動的展開として捉え直した。

令和5年度は、東晋の王弼の詩文を取り上げ、その行論の詳細を検討した。彼は東晋玄言詩を代表する人物であるが、一方で『莊子』『周易』の解釈をめぐる論考を発表するなど、魏晉玄学の中心的課題に取り組んでもいた。そこで本研究ではそれらの資料をあらためて精読し、その語彙と論理的背景とを検証することにより、彼が王弼易を継承する立場にあり、かつ郭象の『莊子』解釈の影響下にあったことを明らかにした上で、魏晉玄学と玄言詩とを相互に一貫する者として把握する視座を提示した。これにより、「玄言詩」を「魏晉玄学」の一つの展開相として見る文学史・思想史的位置づけが確定したといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 和久希	4. 巻 110
2. 論文標題 何劭論——王弼玄学の詩的展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 二松学舎大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 83-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 和久希	4. 巻 41
2. 論文標題 〔発表要旨〕 何劭詩試論——魏晉玄学から玄言詩へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学・思想論叢	6. 最初と最後の頁 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 和久希	4. 巻 112
2. 論文標題 境界線	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 二松学舎大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 194-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 和久希	
2. 発表標題 何劭詩試論——魏晉玄学から玄言詩へ	
3. 学会等名 筑波大学哲学・思想学会 2022年度大会	
4. 発表年 2022年	

1. 発表者名 和久希
2. 発表標題 王船と韓康伯——「神」なるものをめぐって
3. 学会等名 2022年度漢唐思想文化研究シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和久希
2. 発表標題 ユ闡初探——東晋玄学と玄言詩をめぐって
3. 学会等名 2023年度漢唐思想文化研究シンポジウム
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件	
1. 著者名 二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究センター（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 長久出版社	5. 総ページ数 260
3. 書名 近代日本の学術と陽明学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------